

夏休みに親子で作る地域の安全安心マップコンテスト

Map Contest for Learning about Issues on Regional Safety and Security with Parents during Summer Vacation

村中 亮夫・大槻 知史・吉越 昭久
Akio MURANAKA, Satoshi OTSUKI,
Akihisa YOSHIKOSHI

1. はじめに

地図を利用した防犯・防災情報の提供は、文字による情報伝達と比較して情報の受け手に理解されやすい。そのため、自然災害や人為的災害などの危険情報が提供される場合、しばしばハザードマップや犯罪マップなどの地図が活用されている(塚本・楨田 2003、古谷 2003、熊木 2003、齊藤ほか 2006)。とりわけ近年では、地理情報システム(GIS: geographic information systems)に関わる情報処理技術も進展し、災害や犯罪の危険性をデジタル情報としてインターネットで配信する取り組みも見られるようになった(坂上・古瀬 2003、中谷 2007)¹⁾。

一方で、地域住民が一方的な情報の受け手になるのではなく、地域住民が地域調査を行い、独自の地図を作成する取り組みが行なわれている(小関 2004)。地図の作成作業からは、情報収集の段階で現地を歩き身近な地域を観察することで、自然災害発生時の避難経路や犯罪危険性の高い場所について効果的に理解を深められる(平 2006)。近年、こうした取り組みの一種として、小学校単位での防犯マップの作成や、各機関が主催する防災や防犯、交通安全に関するマップコンテストが実施されている(小宮 2005a)²⁾。

現在、立命館大学歴史都市防災研究センターでは文部科学省学術フロンティア推進事業や科学研究費補助金などの競争的研究資金をもとに、文化遺産防災を核とした歴史都市の安全安心に関わる学術研究が推進されている。また、当センターは民間企業や政府・自治体、国際機関との緊密な連携をもとに、文化遺産防災の研究のみならず、地域の防災力・防犯力の向上に資する活動を積極的に展開している。

このような活動の一環で、前述した各機関の取り組みを参考にし、当センターでは2007年度に京都市内の小学校に通学している小学生に地域の安全安心への関心を深めてもらうことを目的とした「地域の安全安心マップコンテスト」を企画した。本コンテストは、小学生と保護者(ないしは地域の住民)と一緒に地域の安全安心について調べ、マップを作成する過程で、その地域の安全安心に関心を持ち、地域の住民も「子どもの安全安心」について情報の共有を図ることを通じて、地域の防災力・防犯力の向上を促すことを意図している。そこで本稿では、コンテストの事業内容を整理し、その成果と課題を検討することを目的とする。

2. 企画概要

(1) 課題内容

本コンテストでは、身近な地域の安全安心に関する地図を小学生と保護者に作成してもらった。地図作成のテーマ設定では、地震などの自然災害発生時の避難経路・場所や通学時の交通安全、子どもの遊び場の安全安心、子ども／大人からみたヒヤリハットマップなど、地域の安全安心に関する内容であればテーマは一切問わないこととした。

地図の大きさは A0(841mm×1189mm)以内としたが、応募者の作成時における自由度を出来るだけ高めるために、A4 用紙や A3 用紙などを用いて作成したマップを模造紙にテープなどで留めたり冊子状でまとめたりする方法でも受け付けることとした。なお、安全安心マップの作成にあたり、『改訂版 地域安全マップ作成マニュアル』(小宮 2005b)を募集要項中で参考書として紹介した。

(2) 実施期間

募集期間は 2007 年 7 月 20 日(金)～9 月 28 日(金)である。小学生と保護者・地域の方々が十分な時間を持って地図作成に取り組めるよう、募集期間を小学校の夏休み期間とした。また、夏休み期間に作成した地図を追加で修正する便宜をはかるため、最終的な締め切り日を 9 月末の週末に設定した。

(3) 諸機関との連携

本コンテストでは京都市内の小学校に通学している小学生に関心を持ってもらえるよう、NHK 京都放送局、NPO 災害から文化財を守る会、京都市教育委員会、(財)京都市景観・まちづくりセンター、京都新聞社、人文地理学会、立命館地理学会の各機関より後援を得た。また、京都市内の全小学校や図書館、コミュニティセンター、公民館、カルチャーセンターなどに、企画の案内と募集要項を送付し広報依頼を行なった。さらに、京都市教育委員会生涯学習部が運営する「みやこ子ども土曜塾」³⁾の協力のもと、土曜塾のホームページや情報誌『GoGo 土曜塾』においてコンテストの情報を広報した。

3. 地域の安全安心マップコンテストの実施

(1) 審査委員会

応募作品は文化遺産や防災まちづくり、地理情報に関する7名の専門家(表1)によって構成される審査委員会において審査された。本審査委員会では、応募作品について、①文章・図表の表現、②目的・主題の明確さ、③独自性(オリジナリティ)、④全体の構成、⑤データの充足度の5項目(表2)について、10点満点で審査が行われた。この審査結果をもとに、各応募作品の合計得点が集計し、高得点のものから順に、最優秀賞(センター長賞)1点、優秀賞1点、入選3点、佳作5点が選定された。合計得点が同点の場合は、再度審議を行なった上で順位を決定するものとした。

表 1 審査委員

氏名	所属	役職
土岐 憲三氏	立命館大学歴史都市防災研究センター	センター長
吉越 昭久氏	立命館大学歴史都市防災研究センター	副センター長
大窪 健之氏	京都大学大学院地球環境学堂	准教授
	NPO 災害から文化財を守る会	幹事
林 春男氏	京都大学防災研究所	教授
鐘ヶ江秀彦氏	立命館大学政策科学部政策科学科	教授
益田 兼房氏	立命館大学歴史都市防災研究センター	特別招聘教授
矢野 桂司氏	立命館大学文学部人文学科地理学専攻	教授

表 2 審査内容

項目	ポイント
1. 文章・図表の表現	文章や地図、図表の表現が明確であり、分かりやすいかどうか。
2. 目的・主題の明確さ	目的・主題(テーマ)が明確なものとなっているか。
3. 独自性(オリジナリティ)	革新さ・アイデア性・作成にあたっての工夫が見られるか。
4. 全体の構成	文章や地図、図表のバランスが取れた作品であるかどうか
5. データの充足度	十分な地域情報の収集がなされているか。

表 3 応募者の属性

	小学校名				合計
	御室	静原	ノートルダム学院	立命館	
第 1 学年	0	1	1	3	5
第 2 学年	0	1	1	5	7
第 3 学年	0	1	0	4	5
第 4 学年	0	1	0	2	3
第 5 学年	1	1	0	0	2
第 6 学年	0	0	0	0	0
合計	1	5	2	14	22

(2) 応募状況

本コンテストには京都市内の公立・私立小学校 4 校から 18 件(京都市立御室小学校=1 件、京都市立静原小学校=2 件、ノートルダム学院小学校=2 件、立命館小学校=13 件)の応募があり、マップ作成には 22 名の小学生が取り組んだ(表 3)。学校別に見ると立命館小学校からの応募が全応募 18 件中の 13 件(72.2%)を占め、立命館附属校からの応募が高い割合を占めている。

表4 受賞作品

受賞内容	学年	応募形式	タイトル
最優秀賞	3年	個人	私の通学路もより駅(地下鉄十条駅)安全マップ
優秀賞	1年	個人	世界文化遺産「清水寺」を守るマップ
入選	3年	個人	静原みんなの安全安心まっふ
入選	3年	個人	私の学区の通学路 安全な所ときげんな所
入選	3年	個人	新林安全安心マップ
佳作	2年	個人	BICYCLE MAP
佳作	1-5年	団体	静原安全マップ
佳作	4年	個人	火の用心！草津宿防災マップ～消火栓はここだ～
佳作	2年	団体	下鴨安全安心マップ
佳作	5年	個人	御室小学校区安全マップ
ユニーク賞	1年	個人	安全安心マップ
ユニーク賞	2年	個人	ぼくの町の安全マップ

また、学年別の参加者を見てみると全参加者22名中17名(77.3%)が第1学年～第3学年であり、高い割合を低学年の生徒が占めている。

(3) 審査結果

2007年10月2日(火)に歴史都市防災研究センターにおいて審査委員7名による審査の結果、表4に示す12作品に対して賞が授与された。当日の審査委員会では複数の審査委員より特に独自性の高い応募作品については最優秀賞、優秀賞、入選、佳作とは異なるカテゴリの賞の新設意見が出たため、審査委員会で審議の上、特に独自性の高い「安全安心マップ(第1学年、個人)」、「ぼくの町の安全マップ(第2学年、個人)」の2作品についてユニーク賞を授与した。最優秀賞は「私の通学路もより駅(地下鉄十条駅)安全マップ」(図1)を作成した立命館小学校3年生の児童が受賞した。

(4) コンテストの成果と課題

本コンテストは立命館大学歴史都市防災研究センターでは初めての企画であり、今後の企画立案の成果と課題を検討すべく、生徒の保護者(もしくは生徒の教員)に募集要項と同時に本コンテストに関わるアンケート調査票を任意で提出をお願いした。その結果をもとに、本コンテストの成果と課題を検討したい。

まず、安全安心マップ作成による地域の安全安心に対する関心の高まりについて、5段階⁴⁾で評価してもらった。すると、有効回答であった16名のうち「とても高まった」は87.5%(14名)、「やや高まった」は12.5%(2名)であった。一方で、保護者から見て、安全安心マップ作成により児童が地域の安全安心に対して関心が高くなったかを5段階⁵⁾で評価してもらった。すると、有効回答



図1 「最優秀賞」受賞作品

16名のうち「とても思う」は56.3% (9名)、「やや思う」は43.8% (7名)であった。このように、安全安心マップ作成が、児童・保護者が地域の安全安心に対する関心を高めることに貢献したと保護者は評価している。

地域の安全安心に対する関心を高める安全安心マップ作成の肯定的な評価は、安全安心マップの作成意義に関する質問の回答にも反映されている。回答の記述内容を見ると、普段、取り立てて安全安心について関心を払うことの少ない生活環境で危険な場所や登下校の道順などを再確認することで、身近な地域の安全安心について関心を高めることが出来たとする意見(表5中のNo.1~3、No.6~8、No.10~11)が目立つ。

このように、本コンテストにおいて、地域を歩き実際に地域の防災や防犯、安全情報を自らの手で地図化することが、地域の安全安心に対する関心を高めている(小関2004)ことにつながっていると考えられる。また、防災マップ作成による防災に対する関心の高まりが、災害に対する被害

表 5 安全安心マップを作成する意義

No.	記述内容
1.	親子で安全について再認識できる。(30 歳代・女性)
2.	危険場所を確認できる。ふだんとはちがう歩き方が出来る。いかに公的機関がいかげんかがわかった。こども 110 番の家を警察までききに行ったが、見せてもらった資料が古い。全く更新されていない。数年前に作成した状態のままです。いぶん様子が変わっていることを知らない。町内の一時避難所を消防所が把握していないことがわかった。区役所・警察・消防をたらいまわしにされたあげく自らが気をつけるしかないことがわかった。(30 歳代・女性)
3.	安全安心に対して再認識する事ができる。(50 歳代・男性)
4.	今回、個人で安全マップを作成し、個人の安全に対する意識は高まった。マップの作成の作業自体が重要と考える。地域単位の取り組みが望まれる。(40 歳代・男性)
5.	今回このような安全マップを作ってみる機会に恵れ、この作品を学校でも発表させて頂きました。すると、大変反響が頂け、多くの方々に意識をもって頂けるよい機会になったと思いました。(30 歳代・女性)
6.	地域の危険な場所を再確認することができ、自分の身の回りの安全について考える機会がもてる。(30 歳代・女性)
7.	ふだん意識しない範囲にまで、広く深く考えるよいチャンスになる。(40 歳代・女性)
8.	今回避難場所の中学校の先生、交番所、いつも遊んでる公園横の会社の方などにお話を聞き、色々確認出来たのでとても良かったです。(30 歳代・女性)
9.	自分自身の地域への関心が高まりそれによって子供に対しても注意を促すことができると思います。(30 歳代・男性)
10.	作成するにあたって、登下校の道順を確認し、安全安心について、意識が高くなったこと。(40 歳代・女性)
11.	災害時の避難場所や経路の確認ができたり、犯罪の多い場所や時間を認識したり交通ルールを守ろうという意識が高まったりする。(30 歳代・女性)
12.	歩行者が安心して町を歩ける。児童の登下校が安心。(40 歳代・女性)

(注)記述内容は、回答者本人の記述を忠実に反映している。

軽減行動に繋がるとする知見(里村 2006)に基づくと、安全安心マップ作成が生み出す災害や事故、犯罪に対する被害軽減行動の活性化も示唆される。実際、本コンテストにおけるマップ作成による被害軽減行動の効果として、子供の事故や犯罪遭遇に対する注意喚起の行動(表 5 中の No.9)があげられる。

一方で、安全安心マップの作成に対する問題点の指摘も存在する。その代表的な見解としては、安全安心マップに災害や犯罪、事故に関わる情報を掲載することによる地域イメージの低下

表 6 安全安心マップを作成する際の問題点

No.	記述内容
1.	地域がらマナーの悪い車が多いのでマップ上に記入したことで逆恨みされかねない。(30 歳代・女性)
2.	マニュアル化されてしまい、その時の状況に対応できない恐れがある。(50 歳代・男性)
3.	交通安全マップでは、駐車違反や放置自転車など、個人に責任があるものもある。個人情報を守るために工夫が必要である。(40 歳代・男性)
4.	犯罪が多い地域、とされた場合の風評が悪くなる。(30 歳代・女性)
5.	自分の家の近くに「チカン注意」など書いてあると、世間体が悪い。(40 歳代・女性)

(注)記述内容は、回答者本人の記述を忠実に反映している。

(表 6 中の No.4~5)や、地域内での人間関係のトラブル誘引に対する危惧(表 6 中の No.1)があげられる。これは、安全安心マップに関わる既往報告でも引用されているような、ハザードマップ作成による地域イメージの低下や、犯罪情報の地図化による犯罪増加や資産価値の低下を引き起こすとする懸念(伊藤 1998、小山・太田 2006)に対応する。また、防災マップの効果はマップ内に掲載されていない事項に対する被害軽減行動にまで及びにくいとする報告(里村 2006)もあり、マニュアル化による緊急時の臨機応変な対応が阻害される可能性が、自分の手で作成した防災マップに対する不安の 1 つとしてもあげられる(表 6 中の No.2)。

さらに、地図作成に掛かった時間と経費についても質問した。すると、全応募者について地図作成に掛かった 1 作品あたりの経費は 1,000 円以下であり、応募者の 76.5% (17 件の内 13 件)で地図作成にかけた日数は 7 日以下であった。ある程度の経済的・時間的費用をかけることでマップ作成は可能であり、大人と子供とが一緒になって地域の安全安心を考える場を提供する意義は大きいと言える。

以上のように、安全安心マップの作成には意義と問題点が存在するが、安全安心マップ作成が地域の安全安心に対する関心を高める効果は明らかであり、課題については克服しつつ、安全安心マップ作成を用いた地域の防災力・防犯力の向上を目指す取り組みを積み重ねて行くことが求められよう。

4. 結論

本稿では、立命館大学歴史都市防災研究センター主催で、京都市内の小学校に通学する小学生を対象に実施した安全安心マップコンテストの企画・実施内容を紹介し、その成果と課題を検討した。その内容を、以下のようにまとめることができる。

①立命館大学歴史都市防災研究センター主催で「夏休みに親子で作る地域の安全安心マップコンテスト」を企画したところ 18 件の応募が得られ、その内 12 件に対して最優秀賞(センター長賞)1 点、優秀賞 1 点、入選 3 点、佳作 5 点、ユニーク賞 2 点が授与された。

②本コンテスト応募者の保護者に対して行なったアンケート調査からは、安全安心マップコンテストによるマップ作成により、児童・保護者の持つ地域の安全安心に対する関心が高まったことが示唆された。この知見は、地域の危険箇所を自分で調べ地図化を通して考えることで地域の安全安心に対する関心が高まるとする既往研究に対応していた。

③安全安心マップ作成で得られる意義と同時に、問題点に関しても指摘できる。つまり、ハザードマップの作成による地域イメージの低下や、犯罪情報をマップに掲載することによる犯罪増加や資産価値の低下に対する地域住民の懸念である。安全安心マップ作成に際してはこの様な不安を持つ住民に対しても配慮し、問題意識や価値観の共有を進めるべきであろう。

④地図作成に掛かった経費は全応募者について 1,000 円以下、地図作成に費やした時間は応募者の 76.5%が 7 日間以内であった。マップ作成による費用－効果の分析に関しては十分な議論が出来なかったが、この水準の時間的・経済的負担により安全安心マップ作成がかなうならば、マップ作成による地域の安全安心に対する関心を高めるための費用としては決して高いものではないであろう。この点に関する検討は、児童に対するアンケートの実施なども含めて、今後の課題としたい。

[付記]本事業は立命館大学歴史都市防災研究センター主催の事業として、文部科学省学術フロンティア推進事業「文化遺産と芸術作品を自然災害から防御するための学理の構築」(代表:土岐憲三)、および文部科学省科学研究費補助金(基盤研究A)「歴史都市における人為的災害からの防御による安全の構築」(代表:吉越昭久)の一環で行われた。本コンテスト表彰式の模様が、2007年10月29日付けの京都新聞(朝刊)で報道された。

注

- 1) 例えば、以下のページなどがある。①京都府警察本部「京都の犯罪情勢」<http://www.pref.kyoto.jp/fukei/> 2008年1月30日検索、②立命館大学歴史都市防災研究センター「歴史都市京都の安心安全3Dマップ」<http://www.rits-dmuch.jp/> 2008年1月30日検索。
- 2) 京都市では安全マップの作成や防犯教室の取り組みが進んでいる(京都市子ども安全会議事務局 2006)。また、大学や政府、民間企業などの取り組みで、「とうほく☆地域を守る防災コンテスト 2007」や「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」などの企画も行なわれている。
①とうほく☆地域を守る防災コンテスト 2007 実行委員会ホームページ http://www.tsunami.civil.tohoku.ac.jp/hokusai2/tohoku_bousai2007_master/tohoku_bousai2007_master.html 2008年1月31日検索、②社団法人日本損害保険協会ホームページ <http://www.sonpo.or.jp/> 2008年1月31日検索。
- 3) 京都市教育委員会生涯学習部みやこ子ども土曜塾推進担当「みやこ子ども土曜塾」URL: <http://www.doyo-juku.com/> 2008年1月27日検索。
- 4) 選択肢は「とても高まった」、「やや高まった」、「どちらでもない」、「あまり高まらなかった」、「全く高まらなかった」の5択である。
- 5) 選択肢は「とても思う」、「やや思う」、「どちらでもない」、「あまり思わない」、「全く思わない」の5択である。

参考文献

- 伊藤和明「火山防災マップ」をどう生かすか, 自然災害科学, 17 巻 3 号, 195-196, 1998
- 大西宏治「子どものための地域安全マップへの地理学からの貢献の可能性」, E-journal GEO, 2 巻 1 号, 25-33, 2007
- 京都市子ども安全会議事務局『京都市子ども安全ネットワークニュース(7 号)』京都市子ども安全会議事務局, 2006, <http://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000027976.html> からダウンロード可能 (2008 年 1 月 31 日検索)
- 熊木洋太「地震・地震災害とハザードマップ」, 地理, 48 巻 9 号, 29-33, 2003
- 小関勇次「防災マップと防犯マップの作成」, 地理, 49 巻 5 号, 49-52, 2004
- 小宮信夫『犯罪は「この場所」で起こる』, 光文社新書, 2005a
- 小宮信夫『改訂版 地域安全マップ作成マニュアル』, 東京法令出版, 2005b
- 小山浩子・太田 弘「子どものための安全安心 Map」, 地図, 44 巻 2 号, 29-31, 2006
- 齊藤知範・島田貴仁・米里誠司・鈴木 護・遠塚昌瑞・恵良信治・原田 豊「GIS を用いた子どもの犯罪被害に関する地理的分析—公立小学校通学圏を単位とした検討—」, 科学警察研究所報告犯罪行動科学編, 43 巻 1 号, 27-41, 2006
- 坂上寛之・古瀬勇一「WebGIS によるハザードマップ情報の配信」, 地理, 48 巻 9 号, 39-42, 2003
- 里村 亮「仙台市における町内会防災マップの作成と住民の被害軽減行動への効果」, 季刊地理学, 58 巻, 19-29, 2006
- 塚本 哲・榎田祐子「火山ハザードマップの現状と要望」, 地理, 48 巻 9 号, 11-17, 2003
- 中谷友樹「3 次元のハザードマップ」, 矢野桂司・中谷友樹・磯田 弦編『バーチャル京都—過去・現在・未来への旅—』, ナカニシヤ出版, 146-149, 2007
- 平 伸二「地域安全マップの作製とその効果測定」, 福山大学こころの健康相談室紀要, 1 号, 35-42, 2007
- 古谷尊彦「地すべり災害を想定したハザードマップ」, 地理, 48 巻 9 号, 25-28, 2003